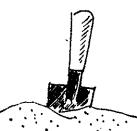


## 保育の中の小さなこと大切なこと ⑤

### —遊べない子ども—

守 永 英 子



去年一年間幼稚園生活を経験した子どもたちの中に、四月

から、新しい子どもたちが入園ってきて、四歳児のクラスは、倍の人数になった。前年度の終りに、子どもたちにも、母親たちにも、"新しく入園してくる人たちを暖かく迎え入れてほしい"という私たちの希望を伝えるが、それが、最初から目に見えて効果があるというわけにはいかない。やはり、毎年、新しい子どもたちの中には、親と離れるのを不安がったり、遊びにただ所在なさそうに、うろうろと保育室の中を歩いたり、一つの場所に腰かけたままじつとしていたりする子どもの姿が見られるのが常である。そして、以前からいる慣れているはずの子どもたちでさえ、環境の変化にとまどうのか、新入りの子どもに差し伸べる保育者の手を、つかんで離すまいと取り合う。このような、新学期の状況の中で、保育者はからだがいくつあっても足りない、という思い

をする。

今年の四歳児のクラスも、例にたがわざ、そのような状態で始まった。泣き叫んで母親のあとを追う子どもはいなかつたが、顔をゆがめて母親から離れることを渋ったA夫にかかわっている間、じつといすに腰かけたままのT夫が気にかかっていた。

A夫は、私がそばにいれば、画用紙を二つ折にして手さげを作るなど、自分の活動を始めることができたが、T夫は、声をかけても誘いにはのらず、手を差し伸べると、自分の手を後にかくして身を引いた。二日目、私はT夫を動かそうと試みることはやめて、彼の隣に絵本を持って腰かけた。絵本をきづけにして彼に話しかけ、彼が知っていると言った本を読んでもらったが、読んでいるうちに、私は他の子どもたちにすっかり取り囲まれてしまい、T夫との間は遠ざかってし

まつた。三日目、皆が帰ったあと、T夫は母親が用事のため、保育室に残った。私は彼と話し合う機会を持った。“家のこと、弟のこと、祖父母のこと”など、T夫は意外に自分から話した。そして翌日は、初めて私の誘いに応じて、手をつないで山のすべり台へ行った。やつと解き放されたかのように、何度も、何度もすべるT夫の姿に、ほっと心の軽くなるのを感じた。まだ、時に所在なさは見えるものの、じつと同じ場所に腰かけていることはなく、草を摘んでにわとりに与えながら、「ぼくが草をあげたから、このとり太ったよ」と得意になつたり、砂場でエプロンを汚して帰るほどになつた。

M雄の場合は、初めは自分の要求をはつきり言わないこと以外、特に目立つことはなかつたが、一週間ほど経つ頃、保育室の片隅のいすに、じつと腰かける姿が目につくようになつた。私は、ある時例のいすに腰かけているM雄を庭に誘つてみた。彼は素直についてきて、ジャングルジムに登り始めた。数人の子どもが私の姿を見付けて、いっしょに登り、「これ、飛行機ね」と遊びはじめ、私がM雄を引きたてるようになつた。「Mちゃん、操縦する人ね」と声をかけると、M雄はそ

れを避けるように、すっと部屋に入つてしまつた。はぐらかされたような気持ちで部屋に戻つてみると、彼は例のいすにまた腰かけている。

この時やつと、私にはM雄の気持ちが分かつた。このコーンナーは、いつも男の子たちが線路や自動車や積木で遊ぶ場所なのである。「M雄ちゃん、ここに入れてもらいたいの？」という間に、彼は黙つてうなずいた。J雄に自動車をもらい、皆と同じように積木で車庫を作りはじめたM雄の、いそいそした様子。その日の帰り際に、J雄をみてにこりと笑つたM雄のうれしそうな顔。M雄の気持ちを分かつてあげられてよかつたとしみじみ思つた。

入園当初、遊べない子どもは多い。しかし、“遊べない”ととらえるのは、大人が外側から見た見方であつて、個々の子どもの、その内面的な様相は異なるものと思われた。“遊べない”という現象のうちに秘められた、個々の子どもの要求をどうとらえるか——子どもたちの、新しい環境への適応をスムーズにするために、考えられなければならないことではないかと思う。